資料３－１

鳥取環境大学平成２５年度前期プロジェクト研究５　鳥取城・市役所周辺・市街地の活性化計画

－鳥取市（二次募集）　鳥取城跡周辺地区等における地域資源の観光資源化について

1　研究目的

鳥取城という歴史的建造物を鳥取の砂丘や花回廊のような有名な観光名所し、鳥取城周辺市街地活用化を図ることができないだろうかと検討した。

そこで、私たちは鳥取城周辺の調査検討している時に、鳥取市役所立替の方向性が竹内市長より発表された。現庁舎は、まちづくりの拠点施設としての活用が決定され、市庁舎を旧病院跡地に新設するというものであった。活性化構想に加えて、現庁舎の活用法について検討を研究目的とする

2　募集内容

鳥取城跡周辺等の地域資源の活用とあわせ、中心市街地における観光客増や地域間交流の拡大を目指し、より多角的で斬新なアイデアが必要である。そこで、本市が進める鳥取城跡の観光推進や中心市街地の活性化をさらに推し進めていくため、鳥取城跡周辺地区における自然資源や歴史的建造物、史跡、文化財等の地域資源の観光資源化の実現手法ついての募集。

3　提案募集のポイント

(1) 地域資源同士の具体的に地図上に描ける観光ルート化

(2) 地域住民の方の意見の反映

(3) 鳥取市景観計画との整合性

4　鳥取市街地町歩き調査

私たちは、この研究で鳥取城周辺の眠れる観光資源を見つけるために歩いて行くなかで、鳥取城周辺を１時間くらいで歩き回れるウォーキングコースを見つけたので、今回調査することに決めた。（右の写真は気になった場所）

1. 案内板

1. 県庁近くの公園

1. 鳥取城跡の池

2. 鳥取県庁前

3. とりぎん文化会館前

4:交差点

5. ベンチ

5. 壁面緑化

5　鳥取城周辺の現状分析・解決策など

1. 県庁前の駐車場
駐車場が県庁前の有名な庭の良さを半減させている。
→駐車場を緑陰駐車場にして緑を入れる。

2. 県庁前の公園
木が植えっぱなしになっている。
→ここをカフェにして、県庁前の通りを活性化させる。

3. 鳥取城前の通り
木が枯れおり、城の風景に合わない木がある。
→鳥取城の風景に合う松や桜に植え替える。

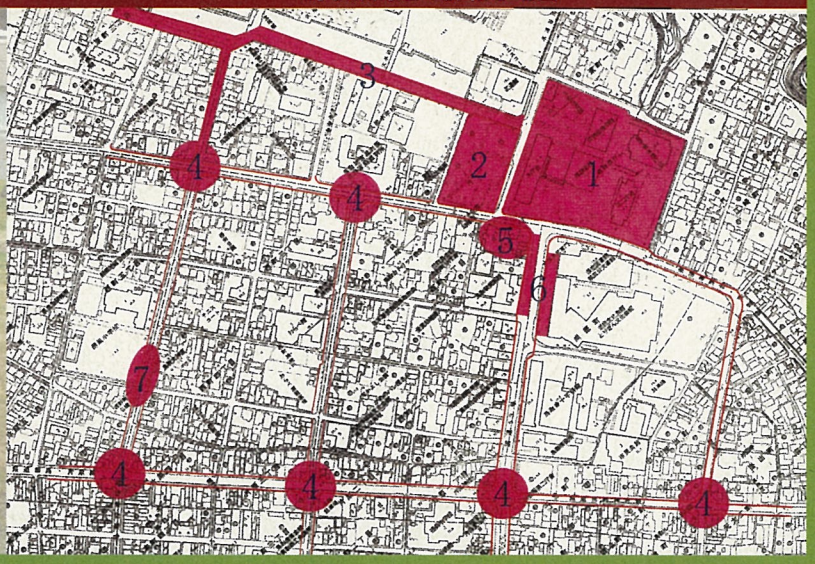
4. 交差点
交差点の周りがさみしい。
→鳥取のシンボルになるものを配置する

5. とりぎん文化会館近くの駐車場
駐車所には、もったいない場所。
→憩いの場所として検討する。

6. とりぎん文化会館前
せっかくのオープンが使われていない。
→ここに足湯や祭りの会場など活用方法を考える。

7. 小学校前の通り
音楽を刻まれた石がある。
→置き場所と規模をよく考える。

鳥取城周辺の詳細な地図



1

5

6

6

2

3

4

7

7. 視点とコンセプト

鳥取城周辺市街地活性化と現庁舎のまちづくり活用策は一体的に考えなければならない。そこで、大火・地震で失われた大地に眠る鳥取の歴史資源を掘り起こし、復活させ、いにしえのモダニズムなランドスケープデザインによる地区計画を考案する。また、現庁舎はまちづくり拠点として、鳥取環境大学　環境学部環境まちづくり学科を新設し、サテライトキャンパスとして活用する。

8. いにしえの歴史城下町回廊構想

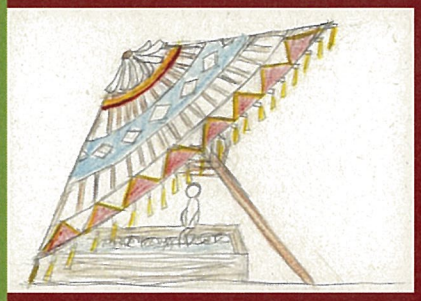
現在の鳥取市街地は大震災と大火により、木造建築主体の旧市街地は姿を消した。そこに、耐震建築や防火構造の区画整理が行われ、安全・安心な町並みは再生されたものの、池田の殿様が築かれた城下町の風情は、鳥取城周辺に垣間みることはできるが、度重なる震災復興事業において、今日の市街地が形成された。そこには城下町の風情は見ることが出来ず、どこの地でも見られる新興都市の町並みが整備された。これは昭和平成における鳥取市の市街地整備の盲点ではなかったかと指摘される。そこで、江戸、明治、大正時代の歴史を振り返り、特に江戸時代の城下町の景観に視点を当て、当時の景観の復活を、まちづくりに目指す。基本方針は次の通り。

（1）鳥取の原風景を活かす　～若桜街道の通りの風景（とりぎん文化会館横）～

・鳥取城に残る石積み、植栽などの佇まいを鳥取の原風景と捉え、いにしえの歴史城下町の景観とふれあえる回廊コースを設定し、歩く魅力を高めるために往時の景観を忍ばせる道、広場などを整備する。

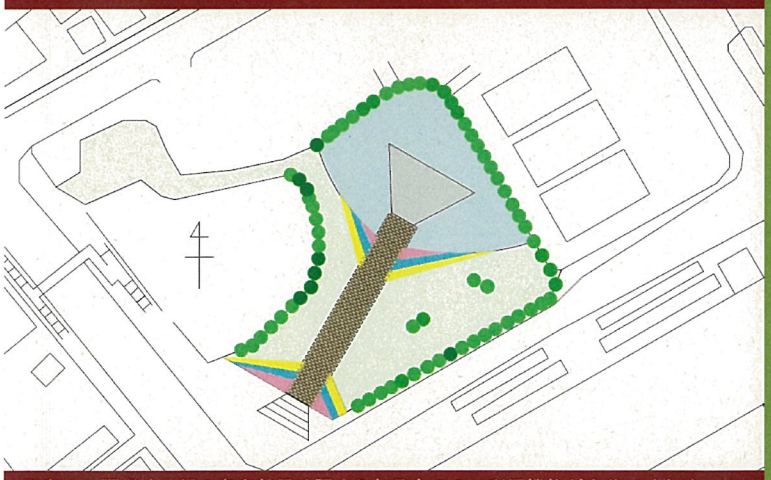
この景観のポイントは
- 若桜街道の通りにケヤキのビスタを作る。
- 鳥取の有名な石積みを民家の周りに使う。
- 道路の舗装を城下町のように変える。

（2）町名からランドスケープデザインを読み取る ～しゃんしゃんの傘をもとにデザインした足湯～



現在の市街地には江戸時代の建物はみることは出来ないが、地図を見ると、桶屋町、弥生町、温泉町と、かつての町並み、職業層を表す町名が残っていることから、アースダイバーの視点に立ち、町名から導かれるランドスケープデザインを考案すると、桶、温泉、女性などのデザインキーワードが導かれ、ファニチャー計画に活かす。

（3）観光公園として再生　～県庁横の久松山を一望できるカフェ～



・既存の公園緑地は緑の存在効果は認められるものの、利用機能が十分ではなく、活用されていない。県庁に隣接する公園がそうである。そこで、道路歩道部と一体的な利用と開放的な空間構成、オープンカフェなどを導入し、観光公園として再生する。

（4）五つの緑をつくる

都市の風格は緑が左右する。都市景観の骨格となる「都市軸の緑」、歩く楽しみを引き出す「歩行景観の緑」、地域住民の交流の場となる「コミュニティの緑」、生態系を繋ぐ「生き物の緑」、災害時に命と財産を守る「防災の緑」などを計画し、道・広場の植栽のデザインに組み込む。

（5）童謡資源の活用

計画対象地には、鳥取が童話の誕生地として知られていることから、すでに音楽にちなんだモニュメントが歩道に設置され、絵タイルが舗装部に埋め込まれているが、うまく景観に馴染んでいない。そこで、本計画によりこれらの資源を活用し相乗効果を目指す。

（6）五感に作用するユニバーサルデザインの導入

すべての人々が楽しめる、ユニバーサルデザインを導入する。車椅子の利用、外国人の利用、視聴覚障がい者の利用などを対象として、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚に作用する総合説明、誘導、説明サインなどを計画する。

環大まちづくり学科のキャンパス構想

今日、地方都市においては大規模量販店が郊外に整備され、都市の空洞化が促進し、鳥取市においては若桜・智頭商店街のシャッター街化が問題となっている。そこに、大学を誘致し、学生の賑わい力がまちを再生する。

商店街に学生がやってきた学生の力で購買力、コミュニティを促進し、そこに住むことにより、居住者年齢を若返らせ、街に元気が出る。

すでに本学では、「まちなかプラットホーム構想」によるにおいても、市街地活性化拠点の提案がなされている。

都市の空洞化は全国的な問題であるが、フィールドを目前に持ち、キャンパス整備に利点のある鳥取で、しかも鳥取環境大学には居住環境整備コースがあり、都市計画、建築保全活用、建築計画などの専門化が既に揃っており、条件は整っている。大都会ではできない、地方都市だからこそできる、鳥取市街地中心部は絶好のフィールドで、まちづくり、都市計画、建築を学びたい学生が全国からの集結を目指す。基本方針は次の通り。

（1）環境まちづくり学を学ぶ学生を全国から集める

環境まちづくり学科は募集学生100名、科目として、コミュニティデザイン、ワークショップ、ラウンドテーブルなどのソフトと、居住環境エコハウス、環境考古学、アーバンデザイン、安全安心学、グリーンビルディング、フィールド演習、環境演習などのハードからなる。

（2）現建物はエコハウスに

建物は耐震補強を行い、太陽光、風、雨水、地熱、壁面屋上緑化などを導入し、エコハウスとして活用する。特に平面計画は開放的な空間構成とし、内装に鳥取県材を活用し、温もりを感じる空間に再生する。

（3）産・官・学の交流拠点に

地域住民はもとより、誰もが立ち寄れるプラットホーム型のサロンを設け、地域交流の拠点とする。鳥取県・市・商工会議所のサテライト機能をも、持たせ、鳥取の産・官・学の交流拠点としても位置づける。

（4）外部空間は多機能交流拠点に

外部空間は持続性、資源循環、コミュニティ促進、修景をテーマとした空間とする。家庭で発生した廃食油の収集基地、クラインガルテン、イベントなどの場として利用するとともに、ランドスケープデザインの見本となる修景を目指す。

公立鳥取環境大学　中橋研究室　上杉周平　香川利季　貞吉亮　村尾太一　森脇勇貴
〒689-1111 鳥取市若葉台北一丁目1番1号
TEL. 0857-38-6700 / FAX. 0857-38-6709